【巻頭言】

新会長挨拶

原島　博

東京大学

このたび、舘先生の後を継いで、学会長の大命を拝受することになりました。舘先生から学会設立への熱き思いを打ち明けられてから早6年。学会設立から数えても5年。ずっと女房役として、力はないけど縁の下でサポートするつもりでいたのに、図らずもこのようなことになってしまいました。

鎌倉幕府も、室町幕府も、そして江戸幕府も、初代（頼朝、尊氏、家康）と3代目（実朝、義満、家光）は有名ですが、なぜか2代目（頼家、義詮、秀忠）は影が薄いようです。でも2代目がいなければ、3代目は生まれないわけで、幕府が15代以上続くように（少なくとも3代目が実朝のようにならないように）、しっかりとした基盤作りに尽力したいと思っています。

その基盤作りとして一番大切なことは、何よりも学会の社団法人化でしょう。なぜか今、私が属している大学も含めて法人化ばやりですが、学会の場合は、それが一人前に自立するために法人になることが必須です。幸い、舘前会長のもとで、法人化へ向けた準備は着々と進んでいます。それを現実のものにすることが、私の会長任期中の最大の課題であると考えております。どうぞよろしくご協力をお願い申し上げます。

＊＊＊

さて、堅苦しい会長就任挨拶はこの位にして、やはりここで、会長就任の時に多くの方から頂いた質問に答える義務があるでしょう。それは、「バーチャルは仮想なのか否か」という学会の本質にも係わる問題に、新会長がどう考えているかということです。

舘前会長は、ことあるごとに「バーチャルは仮想ではない」と力説されました。これは重要なことでした。特に、学会の発足当初は、世間でのVRのイメージは、ほとんどがゲーム機でした。将来の子供は、みな暗い部屋に閉じこもって、HMDと称する眼鏡をつけて、一人にやにやしながら遊んでいる。VRは、そのような世界を実現する技術であるとイメージされていたからです。

例えば、いま私の手元にある国立国語研究所の分類語語彙表（学生時代のもので昭和39年発行）では、幻想、夢想、空想、妄想の次に仮想なるキーワードがでてきます。VRを「仮想現実感」と訳すと、それが「幻想現実感」「夢想現実感」「空想現実感」「妄想現実感」と同じ意味に受け取られる可能性が充分あります。言葉としてはなかなか含蓄がありますが、これらをそのままVRの訳語とすることには、おそらく多くの会員の方は抵抗を感じることでしょう。舘先生は、決してバーチャルは、幻想や妄想ではないと力説されたのです。

一方で、私の持っている別の辞書には、舘先生を勇気づける記述があります。恐竜の名前がついた電子手帳に搭載されている辞書ですが、それによるとバーチャル(virtual）の反対語はノミナル（nominal)、そしてノミナルの反対語はリアル（real）になっています。つまり、反対語の反対語は同義語であると考えれば、バーチャルとリアルは同義語なのです。

私の基本的な立場もこれと同じです。少なくとも技術の立場からは、現実と機能面で実質的に変わらない「事実上の現実空間」を電脳空間内に構築すること、それがVRです。

私自身は、コミュニケーション工学の立場からVRに興

味を持っています。遠隔地にいても、現実と同じ空間を互いに共有して、対面（face-to-face）のコミュニケーションを実現することが目標です。単なる情報共有でなく、感性も含めた現実の空間共有、それがキーワードです。

＊＊＊

しかし一方で、技術者としての自分を離れてみると、「バーチャル＝リアル」だけでは夢がないなあと感じていることも確かです（いよいよ本音？がでたぞ）。

すでにある現実と同じ空間を作るだけでは面白くない。そこには何ら創造はない。むしろ、現実には存在しえない空間を電脳空間で実現すること、そこに衝動を感じます。

例えば、死後の世界。それは現実の世界（現世）ではあり得ない空間ですが、古今東西すべての人の最大の関心事でした。多くの絵画や文学では、天国（極楽）や地獄を、少なくとも精神世界では、本来の意味のバーチャルな（つまり事実上の）空間として扱ってきました。なぜいまVR技術を使って地獄をシミュレーションしないのかと、数年前のVR文化フォーラムで問題提起したことがあります。その回答はまだ得られていません。

さらには、逆に、現実の空間には、決して人工的な電脳空間では実現できない世界があると、私は信じています。電脳空間の特徴は、それが任意にコピーできることです。必要に応じていつでもコピーできるから、安心して自由に処理することもできます。いわば電脳空間は、「掛け替え」のできる世界なのです。それに対して、現実の空間には、文字通り「掛け替えのないもの」がたくさんあります。例えば、人の生命（いのち）、これは掛け替えがありません。予備がありません。

VRは、このような掛け替えのない現実世界を、掛け替えのある電脳世界へ移植する技術であると定義できるかもしれません。でも、何が移植できて何ができないか。その認識があいまいになると、技術そのものが独走してしまう可能性があります。

例えば、生命（せいめい）の「機能」はある程度、人工生命として電脳空間に移植できるでしょう。でも人の生命（いのち）、特に愛する人の生命（いのち）までも移植できるとは、私は考えていません。

むしろ、VRは、そのような掛け替えのないものの大切さを浮き彫りにする分野であって欲しいと願っています。

＊＊＊

とりとめのないことを書きました。このような心許ない青二才が会長では、この先が心配だとお思いになるでしょうが、であるからこそ、どうかよろしくサポートしていただければ幸いです。

略歴
原島博（HARASHIMA Hiroshi）
東京大学大学院情報学環教授

1945年東京生まれ、1973年東京大学大学院博士課程修了、工学博士。同年東京大学工学部専任講師。その後助教授を経て、現在、大学院情報学環教授。工学部電子情報工学科も担当。

80年代なかばから、知的画像通信なる名のもとにマルチメディアの基礎技術に関する研究を始め、最近では、映像構造化や知的符号化を中心とする知的コミュニケーション技術、顔画像処理などの感性コミュニケーション技術、3次元統合情報環境へ向けた空間共有コミュニケーション技術などに関心を持っている。

夢は、文理の区別のない自分なりの新しい学問体系を構築すること。この立場から、電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーショングループの設立にかかわり、また、日本顔学会の設立発起人代表・理事として、「顔学」の構築と体系化に尽力している。

主要共著書に、「情報と符号の理論」岩波書店、「画像情報圧縮」オーム社、「人の顔を変えたのは何か」河出書房新社、「顔学への招待」岩波書店などがある。